

高校野球 200年へ

普及・けが予防：各地で取り組み

少子化や野球離れが進むなか、「次の100年」を目指す高校野球200年構想事業が本格化している。

高校球児が指導

2日、甲府市の山日YBS球場で山梨県内の高校球児と小中学生らが交流する「山梨ベースボールフェスティバル」が初めて開催された。未就学児から中学生まで約700人が参加し、野球教室では高校生の部員約150人が小学生を指導。未就学児とは簡単な野球ゲームでふれあった。

県高野連の小林太郎理事長は、「思っていた以上に野球に興味をもっている子どもたちがいた。やり始めれば楽しい競技。そのきっかけになれたと思うし、高校生にも刺激になったはず」と手応えを語った。例えば、小学生にゴロ捕球を教えていた山梨学院の相沢利俊主将（2年）。「小さい子にどんな言葉を使えばいいか。難しいですね」と悩みながら、気付いた。「褒めると喜ぶので、その後に教えるのがいいのかな。チームをまとめる上でも必要なことだと感じました」

200年構想では、山梨のように小中学生らに野球と触れる機会を増やす「普及」や、長く野球を続けられる環境を整える「振興」、けがで競技を離れる人を減らすための「けが予防」、指導者や選手の技術向上を目指す「育成」、目標を達成するための「基盤作り」を事業の5大目標に掲げ、今年度からスタートした。

検診 小学生から

京都では11月25日、府高野連がわかさスタジアム京都で開いた冬季トレーニング講習会のなかで、「けが予防」の一環となる「医学サポート検診」があった。事前の問診で痛みを訴えた府内の野球部員約280人が、医師や理学療法士らによるエコー検査や触診を受けた。

検診を終えた部員に、通院しやすい病院への紹介状を手渡して励ました。森原医師は同志と立ち上げたNPO法人で、高校生だけでなく小中学生向けの肩・ひじの検診を開いている。――（小俣勇貴）

「2月までに治るように、頑張るな」。京都府立医科大の森原徹医師（51）は

る。「野球ひじは基本的に小学生くらいで起きる。小中学生にオフシーズンをつけて年に1回は検診をするように話しているが、なかなか浸透しないのが現状」と語る。構想の事業を通じて、「けが予防」の意識が高校野球の前のカテゴリーにも広がることに期待を寄せている。



山梨ベースボールフェスティバルで小学生に打撃の指導をする甲府工の選手（右）



京都府高野連の医科学サポート検診でエコー検査を受ける選手（左）